

シリーズ「古代文明を学ぶ」

メソアメリカ文明 ガイドブック

市川彰^[著]



新泉社

01 メソアメリカ文明とは

野球少年だった私は、高校生最後となった夏の試合中に「自分は、将来、何者になりたいのか」と自問していました。その時、私の頭の中には、小学生の頃にテレビ番組でみて、あこがれていた中南米の古代文明が思い浮かびました。そして、考古学を学ぼうと決意しました。

大学を卒業して数年後、私は、JICA青年海外協力隊[†]の試験に合格し、エルサルバドルに派遣されました。これをきっかけに、メソアメリカ考古学の道に本格的な第一歩を踏み出しました。もともと異文化に興味のあった私は、現地の人々と暮らし、野外で調査する楽しさを感じるとともに、しだいにメソアメリカ文明の魅力に惹きつけられていきました。

メソアメリカ文明は、南アメリカ大陸に栄えたアンデス文明とならび、アメリカ大陸を代表する古代文明です。メソアメリカの「メソ」は「中間」を意味します。つまり、北アメリカと南アメリカの中間、現在の国名でいうと、メキシコの北部からグアテマラ、ベリーズ、そしてホンジュラスとエルサルバドルの西部にまたがる地域をさします。

このメソアメリカでは、紀元前1800年頃からスペイン人が入植を開始する16世紀初頭までに、いくつかの地域にさまざまな文明が興亡しました。たとえば、メキシコ湾岸に栄えたオルメカ（前1200〜400年頃）、オアハカ地域[†]に興ったサポテカやミシュテカ（前500年〜後16世紀頃）、マ

ヤ地域[†]で隆盛をきわめたマヤ（前1000年〜後16世紀頃）、それからメキシコ中央高原にはメソアメリカ最大の都市国家とされるテオティワカン（前100〜後600年頃）やメソアメリカ最後の王国とされるアステカ（後1300年〜16世紀頃）などが栄えました。こうした諸文明の総体を「メソアメリカ文明」と呼びます。

メソアメリカ文明の特徴をあえて一言で表現するならば、「豊かな多様性」です。メソアメリカ文明が栄えた地理的範囲は自然環境が多様で、異なる自然環境に適応したさまざまな生業が展開しました。噴火、地震、大雨、干ばつなどの自然現象も起こりました。そして、メソアメリカ全域を政治的に統一するような国家や王朝、そして共通する文字（言語）がありませんでした。また、ラクダ科動物や馬のような大型の家畜が存在せず、移動は基本的に徒歩でした。それにもかかわらず広範囲の交易網が発達したことがわかっています。つまり、多様な自然環境の中で多様な国家や王朝が各地に存在し、多様な言語が飛び交う文明でした。異文化交流や多言語社会は、何もいまに始まったことではなかったのです。

メソアメリカ文明では、青銅器や鉄器といった金属器が実用化されることなく、石器が主要な利器として使用されつづけた点も特筆に値します。これはメソアメリカ文明が遅れていたことを意味しません。これからみていくように、自然環境と融和した世界観と農耕技術を発達させ、高度な建築技術を駆使して都市を造り、複雑な文字や暦の体系を使って記念碑を残しました。メソアメリカ文明を創り、支えた人々は、便利さや効率ばかりを求めがちな現代の私たちとは異なる考えにもとづいて生きていたのです。

本書では、こうした世界的にみてもユニークなメソアメリカ文明のエッセンスを紹介します。

[†] 国際協力機構 (Japan International Cooperation Agency = JICA) が実施しているボランティア事業。

[†] 本書では、「前1200〜400年」とした場合、「〜400年」は「前400年」を示す。紀元前/後にまたがる場合には「前1200〜後400年頃」と表記する。なお「紀元」は各項初出のみ記す。

[†] オアハカ地域は、現在のメキシコ南部に位置する。大部分は高地で山々にかこまれた複雑な地形を呈している。メキシコ湾岸と太平洋岸を結ぶ重要な回廊であったといわれるテワンテペック地峡がある。サポテカやミシュテカを含めさまざまな言語集団が現在も住んでいる。

[†] マヤ地域は、現在のメキシコのユカタン半島から南にベリーズ、グアテマラ、そしてエルサルバドルとホンジュラスの西部にまたがる地域をさす。地理的には大きく、マヤ低地北部、マヤ低地南部、マヤ高地（マヤ南部）に分かれる。ユカテコ、キチエ、カクチケルなどマヤ諸語を話す人々が現在も住んでいる。

01 メソアメリカの遺跡と時期区分

メソアメリカ文明が栄えたのは、メキシコ北部からグアテマラ、ベリーズ、そしてエルサルバドル、ホンジュラスの西半分にかけての約100万km²（日本の国土面積の約3倍に相当）にわたる。時期は大きく、石期、古期、先古典期、古典期、後古典期に分けられる（縄文時代草創期・早期から室町時代に相当）。

時期区分

おもな地域・文化	石期		先古典期			古典期			後古典期	
	前期	中期	後期	前期	後期	終末期	前期	後期		
マヤ地域	マヤ									
メキシコ中央高原	テオティワカン									
メキシコ湾岸	オルメカ									
オアハカ地域	サボテカ									
	ミシュテカ									

*先古典期は「形成期」と呼ばれることもある。また、時期区分の年代については、地域や研究者によって若干異なる。



遺跡地図



チチェン・イツァ遺跡のエル・カステージョ

02

メソアメリカの多様な自然環境

メソアメリカは、北アメリカと南アメリカをつなぐ、アメリカ大陸の細長い中央部に位置し、南を太平洋、北をメキシコ湾とカリブ海にかこまれた地域です。

太平洋岸側には日本列島もその一部をなす環太平洋造山帯があり、メキシコ中央高原やオアハカ地域といった山々が連なる壮観な景色が広がっています。そこにはテオティワカン、アステカ、サポテカといった諸文明が栄えました。

一方、メキシコ湾岸には低地が広がっており、そこにはオルメカ文明が栄えました。

メキシコ湾とカリブ海の間には、海に突き出るようにユカタン半島が広がっています。その南にはグアテマラとベリーズという国があり、その国土の大半は熱帯雨林でおおわれています。さらに南に行くと、先の環太平洋造山帯の一部をなす山々が東西に連なり、それらを越えると太平洋岸に出ます。このユカタン半島から太平洋岸にまたがる地域は、マヤ低地北部、マヤ低地南部、マヤ高地（マヤ南部）と呼ばれ、マヤ文明が栄えました。

メソアメリカの季節は、雨季（5〜10月）と乾季（11〜4月）に分けられます。年間降雨量が250ミリメートルにも満たない地域から3000ミリメートルを超える地域まであります。熱帯および亜熱帯気候に属するため、年間を通じて暖かいところがほとんどですが、一日の寒暖の差が激しい

場所もあり、5000メートルを超える山々には雪が降ることもあります。

メキシコ中央高原、オアハカ地域、マヤ高地、マヤ低地北部は、熱帯サバンナやステップの半乾燥地帯です。メキシコ中央高原は海拔約2200メートル、オアハカ地域は海拔約1500メートルに位置し、やや冷涼で降雨量が少ないところです。マヤ高地は海拔が800メートルを超え、マツなどの針葉樹林が広がっています。こうした高地では、黒曜石やヒスイといった資源が豊富です。また、メソアメリカの神聖な鳥であるケツアル鳥が生息しています。

メキシコ湾岸やマヤ低地南部に広がる熱帯雨林は生物の宝庫で、コンゴウインコ、ジャガー、クモザルなどが生息しています。

一方、マヤ低地北部は平坦な石灰岩台地の上にあり、海拔100メートル以下のところが大半です。川や湖がほとんどないため、地下水や雨水の浸食で石灰岩台地が陥没してできたセノーテと呼ばれる天然の泉や、バホと呼ばれる自然のくぼ地に溜まった水を生活用水として利用していました。メキシコ湾、カリブ海、太平洋に面した地域の多くは高温多湿で、マングローブ林が広がっています。海産資源が豊富だけでなく、装飾品として重宝された貝も採取できます。さらにメキシコ湾やカリブ海沿岸は良質な塩がとれることで有名です。太平洋岸では、高級飲料の原料として重宝されたカカオや衣服の原料となる綿の栽培も盛んでした。

これからみていくように、山、川、湖、海、空といった自然環境と、雷雨、地震、噴火、干ばつなどの自然現象、そしてさまざまな天然資源や動植物は、メソアメリカの人々の生活様式、世界観や思想の形成、地域間の交流、社会の盛衰にも色濃く反映されており、メソアメリカ文明の多様性を生み出す要因となりました。

02 多様な自然環境の中で育まれた文明

多様な自然環境がメソアメリカ文明の多様性を生んだ。そして自然環境は、古代の人々の世界観の形成と密接に関わっている。山は地下界・地上界・天上来をつなぐ場所として神聖視され、熱帯雨林に広がるセイバの木は世界の中心にそびえ立つ世界樹であった。水は生命の源であり、水に関わるさまざまな儀礼がおこなわれ、洞窟は地下界を意味した。

メキシコ中央高原

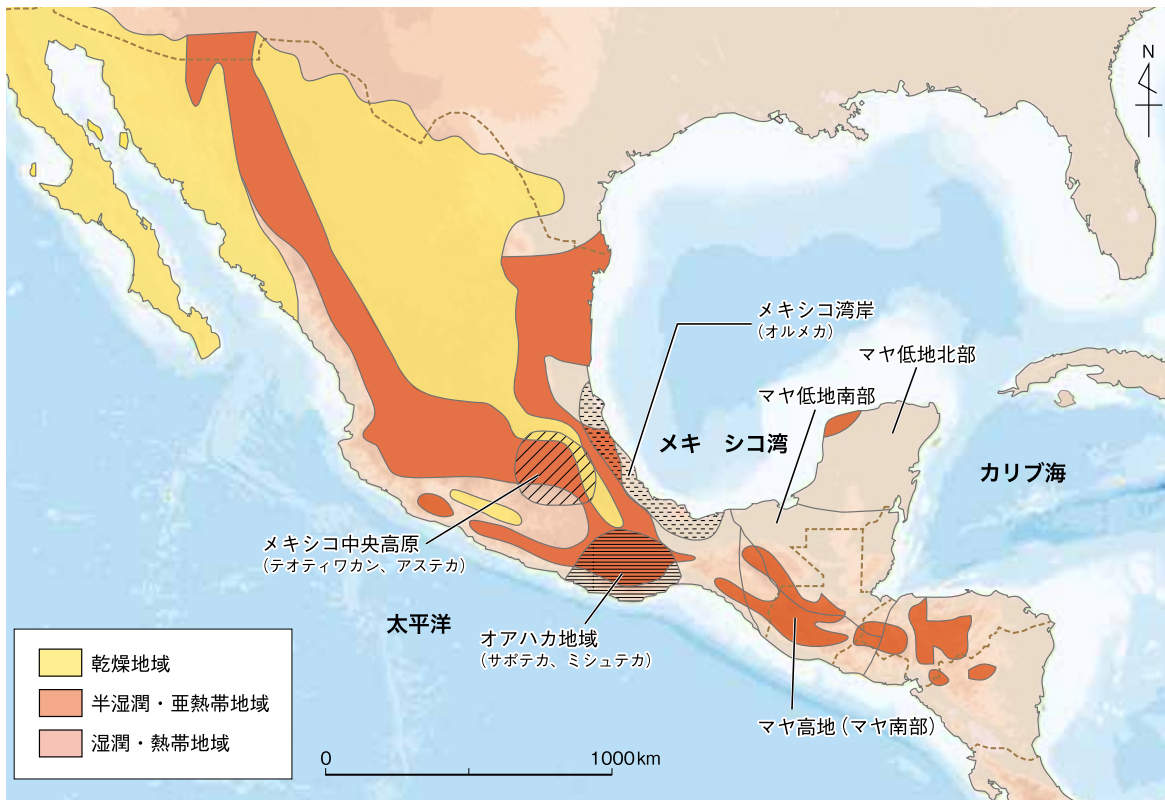


①メキシコ中央高原にあるゴールド山とテオティワカン（手前）
山は地下界・地上界・天上来をつなぐ聖なる場所であった。

オアハカ地域



②モンテ・アルバン遺跡からオアハカ盆地を望む



メキシコ湾岸



③メキシコ湾岸のサン・ロレンソ遺跡周辺

マヤ低地北部



④マヤ低地北部の石灰岩台地とカリブ海(トゥルム遺跡)



⑤天然の泉、セノーテ（チチェン・イツァ遺跡）

マヤ低地南部



⑥マヤ低地南部の熱帯雨林（中央の白くみえるのがカラクムル遺跡の神殿ピラミッド）



⑦セイバの木
世界の中心にそびえ立つ世界樹とされた。

マヤ高地（マヤ南部）



⑧マヤ高地（マヤ南部）のアティトラン湖
水に関わるさまざまな儀礼がとりおこなわれた。

TOPIC 動物 身のまわりの動物もまた、世界観と密接に関連していた。



- ⑨ジャガー 権力の象徴として崇められた神聖な動物。
- ⑩ケツァル鳥⑪コンゴウインコ 神聖視され、羽根は装飾品にも利用された色鮮やかな鳥。
- ⑫クモザル マヤ神話では人間誕生の過程における失敗品として描かれている。
- ⑬ワニやヘビなど水陸両用の爬虫類 異なる世界を行き来し、つなぐ生き物であった。
- ⑭七面鳥⑮イヌ 家畜化されたことがわかっている数少ない動物。